

平成 12 年度幼児健康度調査項目選定の検討

川井尚（調査項目選定ワーキンググループ・愛育相談所）

A．はじめに

平成 12 年度乳幼児身体発育調査に併せて行われる予定の幼児健康度調査においては、最近の育児環境の変化に応じた今日的な課題を取り上げ調査する必要がある。そこで、この変化について要点をおさえ、新たな項目を選定するための検討を行った。なお、昭和 55 年、平成 2 年調査項目の内現在でも意味がありこの間の変化を捉える必要があると考えられるものは残すこととした。

B．育児環境の変化

新たな項目は以下の諸点を中心に検討選定した。

母と子の孤立

従来、血縁関係や隣人関係によるネットワークがあり、このなかで子どもや老人または病人といった人々をケアしてきた。しかし、主に社会経済的变化に伴ってこのような地域共同体は脆弱化してきたといつてよいであろう。

また、都市化が進み、核家族が主流となり、特に孤立した核家族が様々な問題を生じさせてきている。この家族の孤立が母と子の孤立を生み出し、育児の経験や技術の伝承がないまま母親は孤軍奮闘することになる。母親に何かあったときに、相談にのり、助けたり、肩代わりしてくれる人はきわめて少ない。そこで父親の育児参加が期待されるが、未だ充分とはいえず、母親のみが担っている状況にある。一方、家族構成員が少なくなると、多様な背景、多様な考え方をもち人との人間関係を経験しないで成長する子どもが増えることにもなる。また近所づきあいが減り、小さい子どもがいる家では、母と子で家に閉じこもっている事も少なくない。このように孤立したなかで生活していくことは母と子の心の健康を脅かす大きな要因となろう。

テレビ・ビデオ 生活習慣病

幼児においてもテレビ、ビデオの視聴の時間が増えている。忙しいときはビデオを見させておくことも増えてきたようで、これもいき過ぎると子

どもの生活体験、人との体験を狭めるなど問題であろう。また、食生活も変化し、生活習慣病の温床ともなっている。

育児不安

母親の育児不安もまた、現代の育児の特徴のひとつである。育児不安の性質のなかで最も多いものは育児困難感、いいかえれば育児に自信がもてず困惑し、時にいらだちを感じるようなタイプのものである。多少の自信のなさ、困惑、そして不安やイライラは育児につきもので、その背景要因を考慮しサポートタイプな育児相談が必要であろう。

また、地域社会はもちろん、家族関係も希薄化してきて、親と子の関係にも質的な変化が出てきている。年長になると稽古事や塾が忙しい子どもは、遊び時間はもちろん様々な日常生活体験、そして親子の対話の時間も充分に取れない状況にある。このことが子どもの心の危機信号を見逃しがちな状況を作っているとも考えられる。

子育てサークルへの参加

前述のように母と子の孤立状況を解消するために、新エンゼルプランに代表される子育て支援に関する行政的対応も、徐々に具体化されている。一方、子育てサークル等自主グループに参加することにより孤立から脱却し、仲間同士が支えあうことにより子育てを楽しいものと思える心のゆとりが得られるなど、これらサークルの果たす役割にも期待される。

C．母子健康手帳「保護者の記録」項目の追加

厚生省の指導により、手帳の項目を前回調査に更に追加することとした。

これにより本手帳項目の全国的な標準値を得ることができ、保健指導、育児相談の指針となると考える。

以上の検討に基づいて、平成 12 年度「幼児健康度調査票」を作成した。

なお、本調査は（社）日本小児協会が厚生省の指導のもとに実施する予定である。